夢小袖

星川清司

星川清司

夢小袖

文藝春秋

夢小袖

平成三年八月三十日　第一刷

著　者　星川清司（ほしかわせいじ）

発行者　豊田健次

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話代表（〇三）三二六五―一二一一

印刷所　凸版印刷

製本所　中島製本

定価はカバーに表示してあります

© Seiji Hoshikawa 1991　printed in Japan

ISBN4-16-312710-0

目録

夢小袖　五
その日待ちつつ　九七
橋　一四一
闇のささやき　一七九

装画　小村雪岱　絹本「赤とんぼ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夢小袖

―ゆめこそでー

夢小袖

鶴喜

どうしよう。

御許しは五日のあいだと限られている。さりながら、御本丸にはけっしてもどるまい。おさきはそうおもい定めていた。

幸いに御直奉公ではなかったから、父親藤七が病ゆえと願い出るとすぐに宿下りはゆるされた。きのう村松町の家にかえりはしたものの、さて、そこから先の思案がうかばない。

おもいあぐねておさきは、仲よしのお京をさそい出し、それから通油町の書肆鶴屋へと赴いて、これも仲よしのおとくから、よい知恵を授かろうという気になったのだ。

きのうまでの御殿奉公とはちがって、髪も髱ではなく、やつし島田に羽元結かけて朱塗

の櫛、伊予染めの小袖に帯は縞博多で朱天鵞絨の緒をすげた塗下駄という拵えで、やっと煎餅屋の娘らしく身軽くなった。

二年ぶりの町の風は頬に心地よいけれど、心もちばかりは重かった。

日本橋通油町の地本問屋鶴屋は、いつもながらの繁昌で、折よくおとくは見世先の帳場格子のなかにいた。表には箱行燈の四方に、鶴の紋様と地本問屋、鶴屋喜右衛門、そうし錦絵の文字。供をつれた大店の妻女、芸者やら囲い女、参勤の田舎侍、大風呂敷かついだ出入りの製本師などで殷賑っている。

「おとっつあんが寄合で出かけているものだから」

めがね越しに見迎えておとくがそういった。帳場格子にはいるものの、そろばんも帳付けもそっちのけで草稿読みに余念もない。

「ねえ、どうしたらいいのかしらん」先程からお京が懊れてくりかえしている、「とくちゃん、聞いているの」

「あいよ」

「咄をしっかり聞いてあげてよ」とお京がつづけた、「さきちゃんの一大事なんだから」

「聞いてるったら」

おとくはひどい近目だから、めがねをかけても顔をすりつけるようにしないと一行一行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

をたどれない。その藍色表紙の草稿は、作者が丹念に綴じこんで仕立てたらしく、表題には紙貼自筆で、「面影草紙後帙」とある。
「だめ」お京が草稿を取りあげてにらんだ、「もっと真身で聞いてくれなくちゃ」
「聞いているというのに」
「さきちゃんがさ、とんだ事になっちまったのよ」とお京がつづけた、「御本丸の御奉公でお部屋さまに目をかけられ、なんとおどろくなかれ、公方さまのおめにもとまっちまったのだって」
「よくあることよ」おとくは案に相違で惝りしたようすもなく、「さきちゃんほどの縹緻よしならふしぎはない」
「そんなこといわないで、知恵者のとくちゃんがたよりなんだから」とおさきがいった、「御殿勤めにもどらなくてすむように、だれもが得心のいくようなよい思案を、ね、おねがいだから」
おさきとお京、ともどもに手を合わせて拝まれても、おとくの返辞はつれなかった。
「女の出世じゃあないか。公方さまの御意に召したなんて町方の果報だよ。わたいたちとは女の格がちがっちまった」
「なにいってるの、からかわないで」気のつよいおさきがいい撥ねた、「なにも好きこの

んで大奥へなんか上ったのじゃなし、よんどころない義理でそうなったのは、とくちゃんだってしっているでしょ」

よんどころない義理というのは、こうである。――もともとおさきの父の父、つまり祖父というものは、旗本小普請組の御家人で、無役の身だから芸好きが昂じて戯場の囃方となった。武家をすてて芸人になった。おさきの父親藤七が煎餅屋のくせに度し難いまでに頑固なのも、侍気質の血をひいているせいかもしれない。その血につながる旗本衆、本所割下水に住居のある生田助次郎というのがいて、これも百俵泣きぐらしの御家人で、一存勝手に願い親となって縹緻よしのおさきを御殿奉公にと手続きをしてしまった。一存勝手というのは当らないかもしれない。藤七のほうでも生田のすすめに乗ったのだから。――なんとか小町とよばれるほどの縹緻ながら気のつよすぎるおさきには、大奥御奉公にまさるものはあるまい。行儀作法をきびしく仕込まなくては、とそうかんがえたのだ。それがおもいもよらぬことになった。

「大奥なんていやなところよ」とおさきがいった、「御部屋さまは迚もいい御方だけれど、わたしは、やっぱり町なかのくらしが好き」

「でも、お手つきとなったらたいした出世だよ」そういってからおとくがいいにくそうに声をひそめた、「それで、もうそうなったのかえ」

「まだよ、そんな」つんとしておさきがいった、「御恩になった御部屋さまをさしおいて、わたしがお手つきに召出されるなんて、それじゃあ女の忠義が立ちません」
「だからこそ、さきちゃんは宿下りしてきたんじゃないか」とお京もことばを添えた、「ねえ、どうしたらいいとおもう、とくちゃんは」
御部屋さまがいっそ気立てのよい御方で、わたしを御吹聴あそばすものだから、それが仇となったのだとおさきが吐息をつくと、おとくが思案深げに首をひねった。
「御意に召してもこちらが不承知、――」とおとくがいった、「そうはいっても、こっちの気儘が通せるものなのかしらねえ」
「とくちゃん、おねがい」おさきがせつなく声を搾った、「なんとかたすけて」
「そうはいってもねえ」とおとくはくりかえし、「戯作者を対手にするのとはわけがちがう、御上におもいとどまらせるなんて」
そんなことはない。おとくならばきっとよい思案を恵んでくれるにちがいない。おさきもお京もそうおもい込んでいた。とし下ながらおとくは、ちびのときからあたまがきれて、読み書きだっていちどでなんでも覚え込んでしまう。地本問屋の娘だからとはいえ、とし十七で博覧強記、大仰にいえば古典随筆軍記野史はもとより、唐の珍書奇籍から仏典の類いにまで及んでいる。

この鶴喜は、地本問屋のうちでは古い家柄の書肆で、絵草紙問屋を兼ねて営み、代々鶴屋喜右衛門を名告った。喜右衛門はみずから筆が立ち、のちに豊國のさし絵で「絵本千本桜」が大当りとなるほどの才人だったが、その人品は、「大酒、婬情満ち」との蔭ぐちもあった。それゆえ鶴喜に出入りの戯作者たちは、主人喜右衛門よりも二ばん女のおとくのめがねに叶うのを、鶴喜板行第一の関門と見なしている。それでいておとくは、そそっかしく小づくりの肥っちょで、縹緻もじまんできない根っからの剽軽女だ。

おさき、お京、おとくの三人は、むすめ六歳の芸事はじめに中橋の文字豊という常磐津師匠の稽古所で三味線と踊りをならった。ともどもそこでしり初めた仲よしである。おさきがことし十九で、お京が同いどし、おとくが十七になった。おさきの家は村松町の煎餅屋、お京は室町三丁目東横丁にある料理茶屋のひとり娘、おとくは通油町の地本問屋の二女という取り合わせ。

わが友ながら、さすがはおさき、御部屋さまへの忠義立て、義理立てもさることながら、町ぐらしがいっち好きとは、江戸女の心意気がおとくの身にしみる。さればとって、御城にもどらなくてすむ工夫はといわれても、これという思案がおもいうかびはしない。

仔細らしく小首を傾げたおとくの態を見て、おさきがなにかいいさしたとき、見世の右方に山と積みあげてある書冊と錦絵のそばで、あれこれと品定めしている貸本屋らしい客

の応対をしていた手代が、おとくを手招いた。
おとくがすぐさま立っていくと、「あいすみません、こちらがいま売れているおもしろい書冊十種ばかりと役者絵をとおっしゃいますので」と手代がいう。おとくはうなずいてうしろの草双紙をざっと見まわし、たちどころに京伝、馬琴、三馬、一九など十冊ほどをえらび出し、役者絵は豊國、國貞、それから榮之などを手にとってならべた。その手ぎわ捌きのよいこと、さすがは父親ゆずりの見識でおどろくばかり。
「ま、このへんがお奨めでしょうかしらねえ」
「ははあ、なるほど、――では、それといたしましょう」
「毎度御贔屓にありがとう存じます」
おとくは程よい愛想も忘れなかった。わらうと双目がくるりとして、こどもじみた顔になる。
「あ、それから」と手代がわきの客に目を移し、「こちらさまは膝栗毛二編はないかとおっしゃっておいでなのですが」
「ああ、あれは慥か初刻本が倉に残してあったろう、あれを出しておあげ」
「はい」
その客にもありがとう存じますと愛想をいい、おとくは、おさき、お京のほうへもどっ

てきた。
「おねがいよ、とくちゃん」こんどはお京がいった、「知恵をかしてくれたら、あたしのうちでなんでも御馳走するから」
「え、御馳走してくれるってほんと」
「ほんとうだよ」
「そんなら三人でこれからすぐにいこう。時刻もちょうど頃合いだし」
食いしん坊で大食いのおとくはたちまち勇み立って、「着替えなくてもいいよねえ、この不断着で」といった。
おとくは桟留縞に萌黄の無地帯、おさきは伊予染小袖の地味づくり、お京だけが惣鹿子の振袖に黒繻子帯、島田髷に蝶の細工の銀かんざしというはで好み。芝居ぐるいでおしゃらくのお京は、どこの町すじで贔屓の役者に出会わぬともかぎらぬから、いつでも着飾っている。縹緻といえば中程で、気随気儘ながら何事にも正直なところと毒のないのが取得だ。
三人むすめが連れ立つのと入れちがいに、程なく青葉どきの夕景になるであろう通油町の家並をぬけてきた燕が、軒下の丸に鶴の紋様染めた小のれんをひらりとくぐった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com